

カンキツの省力せん定法に関する試験

* 竹石文雄・* 栗山隆明・** 清水博之

(* 福岡県園芸試験場・** 福岡県朝倉農業改良普及所)

TAKEISHI, F., KURIYAMA, T. and SHIMIZU, H.
Studies on Method of Pruning for Satsuma Orange.

カンキツ園の経営規模拡大にともない、せん定労力の不足が目立ち始めたが、それに対処する一方法として、隔年せん定法が考えられる。筆者らは1966年から1971年まで慣行せん定(毎年せん定)と隔年せん定について比較検討したので、その結果を報告する。

供試樹は28年生の尾張系普通温州ミカンで、せん定以外の栽培管理は慣行に依った。

試験結果

(1) 収量の年次別変化は、隔年せん定区の収量は無せん定年に増加し、せん定年には減少した。慣行区においては年ごとの収量のふれが小さかった。

(2) 1個平均重は収量と同様に、隔年せん定区においてはせん定年の果実は大きく、無せん定年の果実は小さく、慣行区に比べて年次間の変異が大きかった。

(3) 6か年間の収量の平均値は隔年せん定区が慣行せん定区に比較してやや多かった。

(4) せん定量の6か年間の合計値は両区の差は少ないが、隔年せん定区においてせん定をする年には

は、慣行区の1.5倍から2.6倍のせん定量となった。

(5) 枯枝の発生率は1966年と1968年の調査では、慣行区が17.0%と13.4%であり、隔年せん定区が18.6%と16.4%であり、いずれも大差は認められなかった。

(6) 1970年の果実の黒点病、風傷の発生調査では両区間に大きな差はなかった。

(7) せん定の労力調査では、せん定量1kgあたりのせん定所要時間は慣行せん定区が95秒、隔年せん定区が54秒であった。

(8) 1970年における果実のサイズ構成は、慣行区がM16.3%、S33.3%、2S34.9%に対し、隔年せん定区はM9.1%、S32.2%、2S49.9%で、隔年せん定は2Sが中心となった。

以上の結果から、隔年せん定区は年次別の収量の変異が大きいが、枯枝の発生率も大差がないので、経営規模が大きくてせん定労力が不足する場合には果実の品質向上の見地からも隔年せん定でも必ずせん定を実施することが望ましいものと考えられる。

第1表 年次別収量調査

試験区	1966年		1967年		1968年		1969年		1970年		1971年		6ヶ年平均	
	収量	平均果重	収量	平均果重	収量	平均果重	収量	平均果重	収量	平均果重	収量	平均果重	収量	平均果重
隔年せん定区	kg 108.0	g 86.6	kg 58.5	g 63.3	kg 90.6	g 85.0	kg 49.5	g 104.0	kg 117.0	g 79.0	kg 84.0	g 99.3	kg 84.6	g 86.2
慣行せん定区	kg 86.2	g 90.3	kg 55.0	g 61.7	kg 72.6	g 92.5	kg 54.4	g 97.3	kg 82.0	g 88.0	kg 82.9	g 99.0	kg 72.3	g 88.1

第2表 年次別せん定量調査

試験区	せん定量 (kg)						合計
	1966年	1967年	1968年	1969年	1970年	1971年	
隔年せん定区	0	15.22	0	14.62	0	24.42	54.26
慣行せん定区	4.00	7.19	6.41	9.53	21.22	9.68	58.03